

令和2年6月12日 校長 高倉 満

～心に届く言葉～

□通常登校が始まり本格的に授業が再開されて2週間が過ぎました。臨時休校の長期化と6月に入り想像以上の暑さ、体調を崩す生徒もいますが、登下校や授業、そして部活動の様子から「穏やかにリスタートすることができた」と思っています。1年生の表情もしだいに緊張がほぐれて、中学校生活にも馴染んできたように感じます。先生方はどんな感想をもっているのでしょうか。

蒸し暑く、じめじめした季節がやってきます。感染症対策への注意や消毒作業と今までとは違う学習環境や生活環境になっています。どうぞ先生方も体調管理にはくれぐれも注意してください。

今までとは違う日が続きますので、生徒・教師の双方にストレスが溜まりやすくなることが予想されます。こんなときこそ、私たち教師間はもちろん、生徒に対して「温かい言葉」「寛容な態度」で接していきましょう。様々な課題は一人で抱え込まずに学年みんなで（チーム）で対応していきましょう。

「コラムから」

教師は、子どもに発する言葉の一つ一つが問われる職業だ。子どもたちは、教職員の一言で安心し、不安にもなる。子どもたちの心に響く言葉を発していけるようになるか。自ら考え自分や他者と対話を継続することで育まれるのではないか。対話が成立するには、教職員の間に「失敗しても、できなくても、すべてOK」という関係性を築く努力が求められる。お互いが補い合う関係性の中で、それぞれができることを持ち寄り、相手の話を聴くことから始まっていくのである。

今、教職員自らが主体的・対話的で深い学びに向き合っている。新型コロナウイルスの収束は不透明だが、所要の条件の中で可能な教育を創造する営みで得た学びが、子どもの心へ届く言葉を生み出す。

○「正常性バイアス」知っていますか？

クラスター、オーバーシュート、ロックダウン、ソーシャルディスタンス、PCR検査、毎日のようにニュースやネットを独占しています。今では中学生、いや小学生でも瞬時に意味を理解できます。

では「正常性バイアス」という言葉は聞いたことがありますか。東日本大震災の時に、専門家の方々が取り上げていた言葉です。心理学用語で、自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価してしまう人の特性のことです。東日本大震災が起きたとき「警報がでているのを知りながら避難しない」人たちがいたことが指摘されています。正常性バイアスによる根拠のない楽観的思考が対応を遅らせた可能性が指摘されていました。今回の新型コロナウイルス感染症ではどうでしょう。

生徒たちの様子を見ると、正常性バイアスがはたらいていると思える場面があります。あれだけ注意しても「3密を避ける」「距離をとる」と言われても、廊下等での密集、密接を見かけます。確かに報告される感染者数は減りましたがゼロではありません。専門家は「必ず第2波、第3波は襲ってくる」と警鐘を鳴らしています。また身近な地域では感染者が出ていなくても、北九州市は「第2波の真ただ中」と言われています。これから授業や部活動等、教育活動を進めていく中で、思わぬ所で思わぬ「3密」ができないとも限りません。生徒たちには「自分は大丈夫」と思わないで、感染リスクはゼロではないこと、誰が感染してもおかしくない状況であること、またこの状況がしばらく続くであろうことを丁寧に指導していきましょう。6月になり熱中症対策も考えていく必要があります。全員がマスクをしているために、気づかないうちに脱水症状になることもあります。例年以上に神経を尖らせる必要があります。水分補給をはじめ、熱中症対策も宜しくお願いします。